

# 飢餓や渇きは薬では治せない



宮下 亮善

事がと覚悟の上とはいえ、その嘆きはいかばかりと、察するにあまりある。

アフガンを血潮に染めて果つるかな  
哲とふその名永久に語らむ

宮下 亮善

アフガニスタン東部非政府組織（NGO）「ペシャワール会」現地代表の中村哲医師が、昨年12月4日活動中に、イスラム過激派に

こころざし受け継ぎてこそ果てぬ夢  
星の輝き標となりし

大久保洋子

1 襲撃され、73歳で非業の死を遂げた。妻の尚子さんは「いつも頭の片隅に案じていたことが現実になった」と。長女の秋子さんも「これが最後かも」と思いながら見送っていたという。「重たい石が私の胸にずしつと落ちていく感じで、返事をするのがやっとだった」と死亡の連絡を受けたときの心情を、妻尚子さんは吐露している。死が隣り合わせの日常といわれているアフガン。いつかはこのような

昨年12月11日告別式に参列して、中村哲医師への痛切な思いを託した拙いものである。大久保洋子さんより、すぐさま返歌をいただき、ここに紹介させていただきました。この大久保洋子さんとは、大久保利通公の玄孫にあたる方です。思い起こせば時と所は異なりますが、明治の近代国家建設途上、明治

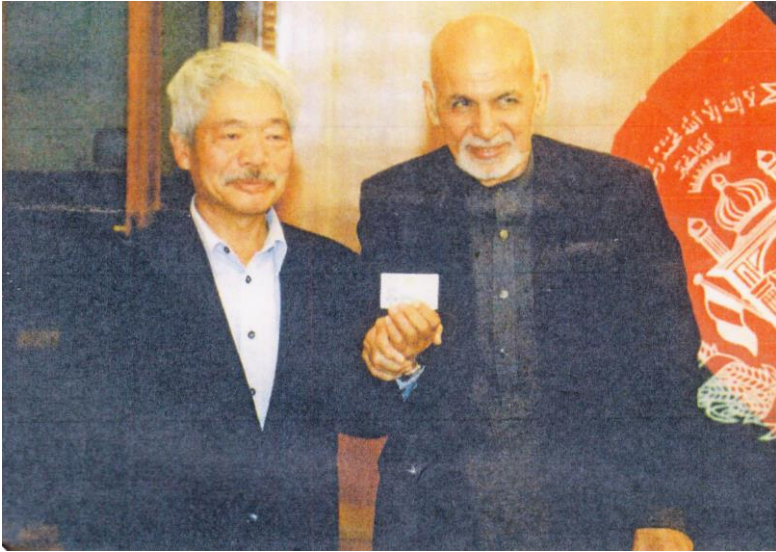
11年5月14日あの『紀尾井坂の変』、非業の死に通じるものがある。まさに、「星の輝き標となりし」その思いだ。

国連の統計によると、アフガンでの戦闘やテロに巻き込まれるなどした民間人の死者は年々増加している。2018年は過去最多の3804人が死亡した。「生きていたら、また会おう」が、現地人の口癖だという。平和な日本ではとても想像できない事である。

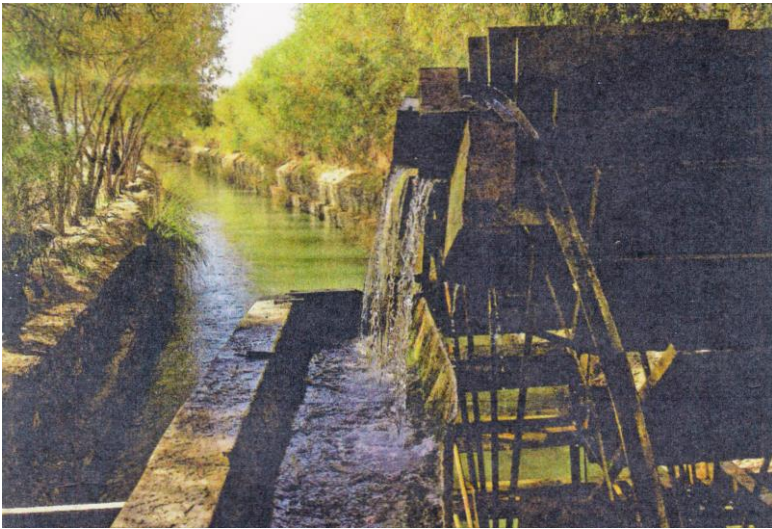
中村哲医師は、1984年パキスタンのカバル・バクトウクワ州の州都に赴任。ハインセン病コントロール計画を柱にした貧困層に携わり、86年からアフガン北東山岳地帯の巡回診療を開始。2000年アフガンは未曾有の早魃により、400万人が飢餓にさらされていた。診療所には、下痢で脱水状態になった幼児を抱いた若い母親が押し寄せて診療どころではない。「飢餓や渇きは薬では治ら

ない」、ここから、清潔な飲料水を確保するために『井戸堀り』がはじまる。その数1600本。02年春からアフガン東部山村での長期復興計画『緑の大地計画』を開始。03年からは灌漑用水路建設に着手し、10年3月全長25キロが開通。

これらの永年の功績により、2019年10月7日首都カブール・大統領官邸にて、ガニ大統領より『アフガン市民証』が授与された。アフガン政府は『最大の英雄』と称えた。「なぜ、あのような人を殺すのですか、とても残念です。悔しいです。」などと、メールや電話をいただきました。アフガンにとっては大恩人です。誰しも日本人ならば率直に思うことですが、残念ながら、豊かになると困る人々がいるという事です。皮肉な言いかたかも知れませんが、貧困がテロの温床になっているという現実があります。なぜなら、豊



2019年10月7日 首都カブール・大統領官邸にて、ガニ大統領より中村医師に『アフガン市民証』が授与された。



カンレイ村の水車。福岡県朝倉市の水車を参考に作られた。毎日1200トンの水を汲み上げている。ちなみに、「マルワリード用水路」は全長24.837km、灌漑面積3000ha。

かな社会に命をかけてまでして金を欲しがる必要はないからです。中村哲医師を襲撃したIS（イスラム過激派）は、アフガン政府とは敵対関係にあり、敵の味方はISにとつては敵という事です。アフガンには「良い人もいる悪い人もいる」しかし、誰であろうとも、清潔な飲料水も必要だし、安心して食べられるものも必要だと。中村哲医師はこのような事も語っていた。万人が認める素晴らしい行為も、その行為を好ましく思わない人々がいるという事を身をもって知らしめている。

しかしながら、目の前に苦しむ人、嘆く人を看過できるでしょうか。たとえ我が身はどうなろうと、結果がどうであろうと、寄り添い手を差し伸べる事こそが尊い事だと。『一隅を照らす』は、中村哲医師の座右の銘だと。

そもそも、『一隅を照らす』の語源は、弘

仁9年（818年）5月13日、日本天台宗の開祖伝教大師最澄の言葉に由来する。『国宝とは何物ぞ。宝とは道心なり。道心あるの人を名づけて国宝となす。故に古人の言わく、径寸十枚、是れ国宝に非ず。一隅を照らす、此れ則ち国宝なりと。古哲また言わく、能く言いて行なうこと能わざるは国の師なり。能く行なうて、言うこと能わざるは、国の用なり。能く行い、能く言うは、国の宝なり。三品の内、唯言うこと能わず、行なうこと能わざるを、国の賊となすと。乃ち、道心のあるの仏子を西には菩薩と称し、東には君子と号す。悪事を己に向かえ、好事を他に与え、己を忘れて他を利するは、慈悲の極みなり。』

比叡山は「世の一隅を照らす」人材の育成を眼目として、1200年もの永きにわたり仰がれてきた大乘仏教の『母なる山』です。

『大乘』とは、大きな乗り物、自分自身も救われなければならぬが、寧ろ自身のことはさて置き他者を救うことに重きをおいた教えである。宮沢賢治の『雨ニモマケズ』、日蓮の三大眼目『われ国の柱とならん、われ国の眼目とならん、われ国の大船とならん』、二宮尊徳翁の『報徳仕法』、西郷さんや大久保さんは言わずもがな、大楠公の『七生賊滅』等等など、すべからく世のため人のため、命をも投げ打って世の安寧を願った人々です。日本という国柄は『大乘精神』発露の国であると言っても過言ではないと思う。

このような伝統精神文化が脈々と受け継がれ、中村医師をして「飢餓や渇きは薬では治せない」その窮状に身を捧げられたものと思われます。人の生き死にに『長短』など問題ではない。『どう生きたかが』大事だと、問われているようである。

一隅を照らす人とは、自らを点す灯明のよ  
うな人であり、行動する人のことです。一隅  
とは、自分自身の身の回りのことです。自分  
が輝けば回りが輝き、社会が輝き国が輝きま  
す。悪事を己に向かえ、好事を他に与えた慈  
悲の人、行動の人、そのご冥福を衷心よりお  
祈り申し上げます。

(天台宗大雄山南泉院住職)

